

わたしの目に映るもの、これから見えてくるもの
—「骨格提言」の完全実現を求める 10.23 大フォーラムに参加して—

文責 井上

大フォーラムについて

「骨格提言」とは「障害者総合福祉法の骨格に関する総合福祉部会の提言」のことで、障害者権利条約で定められた、人を線引きしない福祉政策を求めて、2011年8月に政府に設置された障害者制度改革推進会議の総合福祉部会が発表しました。現行のものとは異なる新法「障害者総合福祉法」成立を目指しています。

大フォーラムは、障害者の権利を表明し、参加者同士を結ぶ場として毎年開かれています。今年オンラインで全国の会場が繋がり、多くの参加者が意見を共有しました。一部の登壇者の原稿はHPに掲載されているので、ぜひご覧ください。

<https://www.crpj-in-japan.com/daiforum>

登壇者の声

ここでは、登壇者の発言の一部を取り上げてご紹介します。

●国の責任

脳性麻痺を持ちながら参議院議員として活動する木村英子さんは、重度訪問介護を充実させることの必要性を訴えます。社会参加のためには、就労のための制度だけでなく、障害者が外出し、介護を受けながら就労就学できるようにする必要があります。木村さんが目指す「しょうがいしゃがあたりまえに生きられる社会の実現」には、介護保障が不可欠と言えます。

また、14歳のときに受けた優生手術につ

いて、国を相手取った裁判を起こしているKさんは、優生保護法に関する国の責任を訴えました。「国が事実としっかり向き合って責任をとってくれる」まで、裁判を続ける決意を表明しました。

●「障害者」の生

兵庫県で精神障害者の当事者会を開くTさんは、神戸市の精神科病院で行われた病院ぐるみの患者虐待の事例を取り上げ、その組織体制や処分方法に見られる障害者への差別を告発します。現状を変える大衆運動の可能性を指摘し、精神科病院解体のために闘っていくことを宣言しました。

また、京都の自立生活センターで活動するKさんは、安楽死という名の下で行われた嘱託殺人事件について、医療関係者の責務と、報道のあり方について問い直しました。社会にはびこる、生きることを否定するようなメッセージに警鐘を鳴らし、生きているということに目を向けてほしいと訴えました。

「私たち抜きに私たちのことを決めるな！」これが大フォーラムのスローガンです。

登壇者たちはそれぞれ、制度づくりや自己決定の場に参加する権利、本当の意味で自己決定できることの重要性を訴えました。

大フォーラムに参加して

●「障害者」と「健常者」

「障害者」に、どのような印象を持ちますか。「障害者」ときいて、思い浮かべるのは、

どんな人ですか。

登壇者の中に、障害名でその人への認識や介護の必要を決めつけずに、と訴える方がいらっしゃいました。同じように、「障害者」「健常者」という分け方をすることで、見えなくなっているものがあると思います。目が見える、耳がきこえる、「私たち」は、実際に見えるもの、聞こえるものが全てだと思っていないでしょうか。

誰かを見るとき、少し立ち止まって、「障害者」としてではなく、目の前にいる「あなた」として見る必要があると思います。耳や手を使って〈見る〉ことも、目や肌で〈聞く〉こともできます。その人が、どんなふうに〈見えて〉いるのか、〈聞こえて〉いるのか、なにを考えているのかを、知ろうとすること、それが「障害者」を「理解する」第一歩となるのではないのでしょうか。

●「自分」に気づくこと

登壇者は、口だけでなく表情でも強く訴えかけてきました。それを聞いていると、自分はこれまで、なぜこういった「声」をきいたことがなかったのだろう、と考えてしまいます。同じ教室に「障害者」がおらず、機会がなかったからでしょうか。もしかしたら、聞こうとしてこなかったのではないかと思います。大フォーラムのような場は、いろいろな場所で開かれているのに、それを知ろうとしてこなかった。なぜ、目を向けよう、耳を傾けようとしなかったのか、知らないふりをしてきたのか、考えなければならぬと思います。

「障害者」に対する目線だけではありません。「マイノリティ」とされる人たちのことを、どれだけ知っているか、どのくらい知

ろうとしてるか。知ったから、「マイノリティ」に対する視線が変わり、差別や偏見がなくなるというわけではないと思います。そもそも、なにをもって「知っている」といえるのかという問題はあります。ただ、新しいことを目にしたとき、耳にしたときに、なぜ、それが自分にとって新しいのかを考える必要があると思います。事実はずっと前から存在していたのに、なぜそれを今まで知らずに生きてこられたのか。それが、自分と「マイノリティ」との関係性を発見する鍵となると思います。大事なのは、自分が「マイノリティ」をどう見てきたのか知る、ということではないのでしょうか。

●声をあげること

大フォーラムには、国会議員や NPO 団体など、様々な方が参加されました。障害のある方も、ない方もいらっしゃいました。参加者たちの話す内容はみんな違いますし、なにを求めているか、具体的な内容は異なります。でも、大フォーラムという場で声をあげることに、大きな大きな意味があるように思います。一人の思いが誰かと共鳴して、何倍にも膨れ上がり、それが法律や制度を変え、広く社会の意識を変革するのです。

社会は、自分とは無関係に動いていくものではありません。それぞれが社会を構成する一人であり、声をあげ、仲間を集めて、権利のために闘い、法律を作ることもできます。様々な形でそこに参加することができ、力になれることがあります。「自分には関係ない」と思わずに、いろいろな場を見つけて考えてみるのが、大フォーラムの目的のひとつでもあり、人権を考えるとということなのではないのでしょうか。